



TITLE:

海外日誌(三)

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(三). 天界 1923, 3(28): 116-122

ISSUE DATE:

1923-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159853>

RIGHT:

## 海外日誌(三)

在米國ヤークス天文臺 山本一清

思ふ。淡いものを探す以外もれなく出来るだけ廣く探すには三時四時位のものに極低倍率を使ふ必要がある。赤道儀では探しにくい。随分澤山の彗星よく似た星雲があるから一々視野のスケッチをして其の赤經赤緯を大體記しておく事で難しいものは一日おいて今一回觀測して其の運動を見る必要がある。運動して居ればたしかに彗星で其の日々運動を出さねばならぬ。位置の測定が必要である。此れは別にのべる望遠鏡は横に動した方が見つけやすい。上から下に入つて来る場合には中々探しにくいものである。探す時に使ふ接眼レンズはクルナー形のものが最良である。餘り廣角ではとても一度には見つけにくいから同じ部分を半分づゝ重ねて二度づゝ探す必要がある。觀測の方では位置の測定が重要な部分である。光度を見つものには焦點外像を作つて廣がつた星の光と比較するのである等しいと思つた星の光度は變光星の觀測をやつて居る人であれば困難ではない。直徑は視野の直徑から離れた二重星の距離等から見ると大抵は合ふ。注意すべきは核の有無と尾の有無と方向で核は出來れば直徑と光度、尾は位置角を調べるのである。(つゞく)

十一月二十四日(金)

いよく寒くなつて來た。今日は北から吹く風が殊に寒い。ダンビー氏によれば、朝の氣温は華氏の十四度であつた。之れは攝氏のマイナス十度で、自分が十五年來京都の冬で経験した最低温度であつた。今日は午後四時頃から、村のビーターソンの家へ深靴と雨靴を買いに行つた。四足の合計金十兩五十斤仙也。夕食後、二人でリ氏の宅へ行つて、ダンスの御稽古。その御禮に、英子とリ夫妻とミス・カルダーに、英語で「桃太郎」の話をしてやつた。

夜十一時から自分はブルース寫眞鏡で觀測中のバーナード教授のところへ行き、いろいろ撮影上の話をきいた。夜半二時歸宅。  
十一月二十五日(土)

朝九時起き、十時から天文臺に出て、例の通り計算。  
土曜日で、午後は誰もぬない。

十一月二十六日(日)

朝十時半、教會へ行つた。今日はコレレといふ人の説教で、主に東洋諸國の教育及び傳道に關することについてであつた。日曜學校では、幼年部ミス・カルグートの求めにより、日本の子供の話をし日本語の讃美歌を歌つてきかせた。

午後はバーナード、センキス兩家を訪問した。バーナード氏方へはパークハースト氏夫妻も來られ、センキンス氏方へはフロスト夫妻も來てゐられた。

十一月二十七日(月)

午後一時二十分より、村の小學校に招かれ、ハイスケールの生徒に日本の國狀の一斑を話した。エハガキやら、切れ地やら、新聞やら、雜誌やら、箸やら、いろんなものを持つて行つた。英子は日本服を着て行つて、日本式の衣食住の説明をした。

夜、曇り。圖書室で勉強。

今日、「天界」第二十二、二十三號到着

十一月二十八日(火)

午前中、パークハースト教授の室でカシオペアのU星光度測定、午後四時から、シカゴのオーディトリウムで開かれてゐる佛人クレマンソーの演説を聞くため、フロスト臺長を始め、臺員悉く無線電話室に集まる。

夜、ザークハースト教授と共に、二十四時反射鏡にて、カシオペアのU星附近の光度撮影をやる。十時終る。今夜はパークハースト氏の室のソファで眠る。

十一月二十九日(水)

南米スキエルーブ氏又々新彗星発見の電報が来た。パンビー氏と自分とは、それ／＼觀測の準備をする。時刻は朝で、緯度は南へ／＼と去つて行くらしい。月が近づいて来ない間に觀測しなければならぬ。

夜十時からパークハースト教授と共に四十時大望遠鏡の室に上り始め、オリオン四重星を見たところが、偶然にもB.M.星が變光最少時期であつた。自分は京都で、一度之れを見たことはあるが、パーク教授は之れが始めてだと言つてゐられる。(同教授は先頃、此の星の變光を認めないといふ意味の小文を發表された人である。事實には勝てないものだ。)

夜半からはパーク教授の指導によつて、此の四十時でルムフオデ部の寫眞を撮る。撮影時間一時間。之れは自分として最初の光榮と喜悅であつた。

十一月三十日(木)

昨夜、四十時の撮影が二時までかゝつた。それから自分はパーク教授のソファで眠つた。そして四時から起きて新彗星を觀測するつもりであつたが、フトね坊して、眼をさましたのは五時過ぎ、もはや澄明である。大急ぎ十二時の塔に駆け上つて、彗星をさがした。空は明るくて見えなかつた。残念であつた。

今日は感謝祭(サンクス、ギビング、デイ)で御休み日だ。自分等も朝から宅でパンビー氏家族一同と共に愉快に遊ぶ。ひる頃エル

ツンからニウカム氏夫妻が来られ、正午には卓かならべて、七面鳥の御馳走。

夜、フロスト氏等の誘引により、天文臺の者總出で、湖畔のヒーリー氏方へ招かれて行き、美しい廣間で、活動寫眞を見た。主に北極地方の寒さうなエスキモーの生活の畫であつた。十時歸宅空は曇り。

十二月一日(金)

ひるの内はパーク氏の室で光度測定。

午後から夜には、圖書室で勉強。空は曇り。

十二月二日(土)

午前中、パーク氏の室でカシオペアU星寫眞版の星調べと測定。午後は自分の室でパーク彗星の位置の計算をした。

夜は二十四時反射鏡で魚座S星の撮影をした。

先目、通信販賣で注文した觀測用羊毛外套其の外四點本日到着。大變よろしい。

十二月三日(日)

午前中、二人で教會行き。

午後はひるれ、四時半頃、ニウカム牧師が訪れて来られ、大あはてに眼をさまして面會した。夕方には散歩に出て、リー氏を訪れた。

夜曇り。勉強。

十二月四日(月)

午前十一時頃、ハーグアドより天文電報二つ到着。一つはルマニアのツウイレル氏が琴座附近に新星を発見したといふ。光度は一等級といふから、又々觀測界を振はすだらうとの豫想。他の一電報はナカムラ氏の彗星発見報である。勿論之れは大本京都の中村要氏に違ひない。「ヤア日本の発見だ」といふので臺長始め、皆々、自分「パンヂーレイ」を言つてくれる。しかし彗星電報の方は電文に不明の個所があつて、星の位置や等級の數の一致が不可解である。星の名も少々おかしい。Herrin Cometである多分 Perrine Cometのうと思ふが、しかし「若しペライン彗星ならば、近頃ロシアのカサコフ氏が發表した豫想位置とは殆んど正反對の位置になつてゐる」と言つてパンビー氏は大に怪しんでゐる。何の事だかわからない。

「第一、電文を確かめなければ」と言つて、電信局にかけ合ふて調査してもらふことになつた。——電信局からは、やつと夕方に技師が来て、疑問が解けた。星の名は依然 *Herrin* で、あるが、位置と光度とは確かになつた、光度が十三等といふので、パンビー氏も一寸観測を躊躇してゐる。

新星のためには、パンビー氏は十二時赤道儀で位置を測ることを、パーク氏は六時カメラでスペクトルと光度を測ることに、自分たちは手傳ふこと、ストルフェ氏は四十時を終夜占領してスペクトルの連續観測を行ふこと、書の間から、臺長フロスト氏は各観測者の室を訪れまはつて部署をきめる。バーナード氏は、明日、よそへ講演に行く筈であるが、こうした特別な場合であるから、夜にはやはりアルミス寫眞機で撮影をするらしい。

準備は全く出来。皆々日没を待つ。午後五時過、一同、それ／＼の宅へ、平常より少し早い夕食をたべに歸つた。自分も宅へ歸つてパンビー氏と共に西向の窓から、夕空を高く見守つてゐた。しかし生憎、空には雲が少しく浮んで琴座は織女だけが雲間から見えるばかり。時々、ヘ星やガ星も見え、稀には白鳥のヘ星も見えかくれずる。けれど、其の附近に一等星らしい新來星は全く見當らない。午後六時頃、雲はよほど薄くなつて、三等星は皆明らかに見えてゐるのに、珍らしい星は何もない。「變だナア」と言つたばかりで、誰もかれも、疑ひも晴れない。「之れも電文の誤りか？」とにかく、天文臺へ、と言ふわけで、夕食後、直ちに出發して見ると、パーク氏もストルフェ氏もリー氏も、皆、既に天文臺へ出て来て、「見えない」と言つてゐる。望遠鏡さい望遠鏡は皆蓋を開け、「ドームを西に向けて、ボンヤリしてゐる。此の時の光景、臺員一同、狐にだまされた形！」

其の夜、夜が更けるまで、皆、天文臺に居残つてゐた。電文の誤りかも知れない。天のごとくに新しい一等星は見えないだらうと、たゞ／＼、外へ出て、東天から昇るつぎ／＼の星座を眺めた。しかし遂に星は誰にも見つからなかつた。——何が此んなに間違つたのか？とにかく未曾有の喜劇であつた。

十二月五日(火)

朝午前四時頃から、自分は二十四時反射鏡で中村華星の搜索をやつた。寫眞も撮つた。しかし見つからない。

今日はパーク華星の位置の計算をする。今夜はパークハースト氏は、十時から四十時でルムフォルト部の寫眞を撮る筈であつたが、空氣の都合上、星像が悪くて、とても駄目。やむなく、月など觀望したりした。好い慰さみであつた。

英子は今日、地下室で寫眞をやきつたりしてゐた。コダク・カメラの。

十二月六日(水)

今日は午前中、測微器室で、パンビー氏から渡された視差寫眞板を測定する。

今日から二日間、村の教會でバザアが開かれるので、天文臺の揭示板も賑々しい。夫人たちは朝からつめかけて行つて、準備に忙はしう。英子も「日本茶」の接待をするので、日本服で、パークハースト教授の自働車で連れられて行つた。

午後六時頃、バザアの會食の時刻には、天文臺の觀測者たちも總出で行く。村中から集つたもの、否、外の村から出掛けて來たものも加へて、總勢二百人。之れが教會の地下室でランチを食べる賑やかさ！食事がすんだ頃、フロスト臺長が立つて、牧師に紀念品を贈る意味の演説をした、十時頃退散。空は曇り。

十二月七日(木)

今日は視差板の測定を續けた。午後終る。何だか、星の像と視差の價との間に疑問があるので、夕方、リー氏と意見を交換した。

今日も、午後六時頃、ランチのため、教會へ行つて見る。地下室は昨日と同じ様な騒ぎ。昨日の経験によつてか、今日の食事は分量も多く、味も好かつた。

十二月八日(金)

島津氏の招きにより、今日は朝七時半の汽車でシカゴに行く。少し朝れたため、朝食も食はずにステーションに馳つけ漸く間に合つた。シカゴに着いた。下町で二三の買物をして、三時頃、日本人青年會に行き、丁度そこで開かれてゐる日本品のバザアの景氣を見た。久しぶりで、御すしの御馳走を喜ぶ。午後四時、約束により

招かれて、大學附近のギルキ牧師の宅へ行き、牧師夫妻に面會した。同牧師は先年、京都大學の松山教授と懇意であつた人で、今日も松山氏の話などが出た。他の來客たちと共に、御茶を頂いて、夕方に島津氏方に歸る。

## 十二月九日(土)

午前中、下町を散歩、歳末の景氣を見る。

午後は日本人青年會の中で、英子はバザーの手傳ひ、自分はポンナリ。

## 十二月十日(日)

午前十一時、第三十六街のハイド・パーク浸禮教會の禮拜式に參列。ギルキ牧師の説教をきく。

午後は早々、島津氏方を辭し二時五十五分、西北停車場から汽車でウイリアムス・ペーに歸る。ペーは鐵道の終點なので、レーキ・セネズ驛を過ぎてから、列車中に居残る客は、ペーの人ばかり、皆々御互ひに知り合ひで、汽車は借りきりの様なアトホーム。今日も小學校の先生達、それに天文臺のバレット氏など同車して歸つた。

## 十二月十一日(月)

今日、は手紙をかいたり、讀書したりした。英子はシカゴ行きで少々疲勞の様子。

夜は、村の小學校でフーパー氏の盲啞教育に關する講演があつてフロスト氏始め、天文臺の主な人々は皆行つた。

## 十二月十二日(火)

にはかに寒くなつて來た。今朝は華氏マイナス二度(攝氏氷點以下十九度)。

今日、圖書室で、フト英國天文協會(BAA)の號外雜誌(ハンドブック)を見たら、ベライン彗星の推算表が載つてゐた。それで見るに、軌道要素に對しては、むしろ簡單な假定をして、計算がしたものであるが、之れの位置は、先日、中村君が京都で發見したものに頗る近い。バハア、中村君は之れを見て、ベラインを搜したのだナ」と合點が行つた。(自分も、すつと以前に此の部分を読んだ筈なのだが、今まで、すつかり忘れてゐた。丁度、その時、パーナード氏が圖書室に居られたので、見せるに、氏も今更、中村君の發見

の意味がわかつたと言つて喜ばれた。自分は、又之れをバンビー氏に見せたら、氏も大に了解された。しかし、それにしては、カサコフ氏の近日點通過の假定が、よほど間違つたものだ。さにかく、之れで中村彗星發見の了解が出来たとして、さて、今日になつて見れば、既に日數も経てゐるから、視野のせまい二十四時反射鏡では觀測が出来さうにない。そこで、自分はパーナード氏のブルース寫眞機を使用することに許された。今夜はパーナード氏は夕暮から午前二時まで續けさまに四十時を用ゐられる筈である。其の間に自分はブルースを使ふと定めて、準備をした。

夕食後、自分は早速、ブルース室に入つて、北極方面の撮影をしたり、二三星の寫眞を撮つたりしたが、夜半頃、大犬小犬の星座が、高く上つて來る時期を見て、此の邊と思はれる中村彗星のあたりを、十時と六時と兩方の器械で撮影した。此の寫眞は特にバンビー氏の好奇心をそゝつた。撮影が終わるや否や、氏は自分の所へ來て「直ぐ現像しなさい。彗星の位置さへ分れば、私は今夜の内に四十時で觀測しますから」と言はれるのである。なるほど、私は早速現像にかゝつた。そして午前三時頃、之れを水から上げて、寫眞板全體を點檢し始めたが、不思議にも、角度十度平方の此の面積に、十五等星までは必ず寫つてゐる此の種板の上に、彗星らしいものは一つも見當らない。自分もバンビー氏も大に失望した。

## 十二月十三日(水)

今日は天氣が悪い。室内で小遊星觀測の整理なごした。

## 十二月十四日(木)

一昨日の中村彗星搜索の不成功が不可解でならない。今日は朝から、同彗星の位置の計算なごした。次ぎの晴夜に尙一度試みたい。

## 十二月十五日(金)

今日は晴。又、パーナード氏に申し出て、ブルースを使ひ、夜半頃、中村ベライン彗星の搜索撮影をやつた。こんどはプリンク顯微鏡にかけるつもりで、連續的に二枚づつ撮影した。此寫眞も、一通り見た所は失敗であつた。どうも其れらしいものは見當らない。パービー氏もやはり此の結果を不思議に思つてゐる。

「前に一九一六年の時の例もある。此度の彗星も急に光りが衰へたもののかしれない」と言つてゐる。

今迄報知も手に入らないところから見るさ、外の天文臺でも此の星を観測してゐないらしい。

十二月十六日(土)

今日は土曜で半日の休み。しかし寒いので散歩も出来ず、宅で小兒供と遊ぶ。空も悪い。

十二月十七日(日)

午前中、例の通り、村の教會へ禮拜に行く。  
午後はリー氏の宅を訪問した。

クリスマスが近づいたため、教會でも、家庭でも、それらしい空氣が一杯いである。

十二月十八日(月)

非常な寒さだ。今朝、オフイスでの臺長の話に、昨夜のレコードは華氏マイナス十度(攝氏氷點以下二十三度)であつた。道もあるいても口元あたりが痛いやうに感じる。

十二月十九日(火)

昨日から引きつゞいて小遊星観測整理のための計算。

夜、英子は婦人クラブの集會だとして、ミス・カルヴァートの宅へ行き十時頃歸る。

十二月二十日(水)

英子は今日から天文臺で、變光星の光度曲線を畫くこととする。自分今日はパーク氏の室で光度測定。

夜自分はパーク氏と共に、四十時によつて、變光星の観測をする星像が悪しくて、寫眞撮影には不適當なるため。

十二月二十一日(木)

かれて注交して置いた大英百科全書第十二版が來た。  
夜、二十四時反射鏡で、變光星の附近二三ミ、小遊星搜索の撮影をする。

十二月二十二日(金)

年末で、村の學校も、いよいよ今日切りで、明日からはクリスマス休暇。今日の午後には生徒たちの演藝があるといふので、天文臺

の先生達も夫人たちも、皆見に行く。幼稚から、ハイスクールに至るまで、歌を歌ふやら、芝居をするやら、陽氣な面白い會合であつた。

夜は又、教會でクリスマス紀念演藝會。餘興に活動寫眞が寫されたが、之れは何所から借りて來たものか、全く、面白くなかつた。

十二月二十三日(土)

世の中は、すっかりクリスマス気分になつてしまつた。人の話をきいても、新聞や雜誌を見ても……天文臺でも今日は誰一人研究してゐない。

十二月二十四日(日)

朝、教會でクリスマス禮拜。式後の挨拶は、もはや、メリー・クリスマス!

正午、バンビー氏宅にはパークハースト氏夫妻が客として來訪。皆々打ち揃ふて食事。それから二時間ほど、大小人一しよになつて室内遊戲。

午後四時頃、英子と、天文臺の周囲の芝生上を散歩する。夕食後はミシリン嬢と歌を歌つた。

いよいよ明朝は、楽しいクリスマス。子供達は靴下を枕下にぶらさげて、楽しんで眠る。

十二月二十五日(月)

誰もかれも、平常より早く眼がさめた。七時の時、階下の廣間でゲイタクトローラの音がマーチを奏するのを待ち、足ふみ揃へて、子供たちと、喜びつゝ、勇みつゝ、下りて行つて見れば、クリスマス・ツリーが美しく飾られてある其の上下に、山なすブレンセント! 皆々凱歌を舉げる。其の内にストルフェ君とミス・ランニングも招かれて來宅、皆でメリー・クリスマスの交換をしながら、食事をする食事が終るさ、一同、クリスマス・ツリーの下に集まつて、此の家のサンタ翁(バンビー主人)から、一々名を呼ばれて、ブレンセントを頂戴する。十時になると、恒例ださあつて、家族悉く打ち連れて臺長フロスト氏の宅に挨拶に行く。すると、既に、こゝへは、何所の家からも集まつて來て、溢れるやうな人數と其の賑やかさ。一同

集まつた頃、どこから飛んで来たか、赤装束白鬚のサンタ・クローズが現はれ、もれなく、プレゼントを渡す。其の度毎に拍手喝采。さて次ぎに來會者は聲を合はせてクリスマススの讃美歌を歌ふ。それから、一同の所望さあつて、英子と自分とは、日本語の讃美歌を歌つた。

正午、我々バンビー家の一族とパーク氏夫妻と、ストルフエ君とミス・ランニンと、招かれて、パレット氏宅に行き、同家の人々と共に午餐を共にする。大人は大人、小人は小人で、別々の卓をかこんで面白く話しながら、之れが一年一回の楽しい食事である。自分は今日ホストンへ向け出發せなければならぬ。午後三時、パレット宅を辭し、一旦家に歸つて旅装をまとへ、パークハーストの厚意により、同夫妻と英子とに送られて、自働車でステーションへ。それから四時發の列車に乗り込んで先づシカゴに向つた。(今回は獨り旅)。

午後七時、シカゴ着。すぐ、電車に乗つて、日本人青年會に行つて見ると、やはり此所も御祭り気分。自分は豫定の汽車時間に、まだ間もあるので、暫く、青年たちと茶話會の席に列した。

午後十一時、島津主事に見送られて、セントラル停車場に行き、ホストン行の切符を求めて、無事列車に乗り込む。列車は夜半十二時發の急行。客は皆發車と共に寢臺の中に入る。

## 十二月二十六日(火)

朝九時、列車の寢臺から起き上つて、外を見ると、車は今丁度デトロイト市の大地下トンネルを出たばかり、土地は英領カナダの雪の野を走つてゐる。

正午、セント・トーマス驛で辦當の立食、それから又、乗り込んで、やはり無趣味の原野を走る。午後三時頃、窓の外が俄かに立派になつて來たかと思つてゐるうちに、列車は止つた。五分間停車。こゝはナイヤガラ、渾身の驛である。早速、カメラと双眼鏡とを持つて、車外に飛び出し、大急がの見物をする。見えてゐる渾はカナダ側の、所謂馬蹄瀑だけであるけれど、壯觀なには相違ない。暫く見はれる。……其のうちに、車掌の注意あり、列車は出發した。汽車は暫くナイヤガラ河に沿ふて、吊り橋まで來たところで一旦停

車。こゝから、又合衆國に入るので税關吏の検査あり、型の通り、まもなく、車は進み始める。

パワロ驛で乗り換へ、それから日暮れて窓外の景色はセロ。乗客は各自讀んだり話したりカルタを取つたりしてゐる。自分は隣りのカルタ取りを何心なく見物してゐる。思ひがけなくも、傍らの一紳士が、こちらを向いて「失禮ですが、あなたはウィリアムスベールかの御方ではありませんか?」と言ふ。こぢらも少々驚いたが、禿頭の此の人相、一寸、どこかで見たことがあるやうでもありまじかく「イエス」と答へる。すると其の人「私はマデソンのステピンスです」「オ、ミスター・ステピンス!」恒星の光度の精密測定で有名なステピンス。今度のホストンの天文學會に於ける幹事をなさめる筈のステピンス。此の人に、こゝで出會はうとは全く思ひがけない喜びであつた。話しは直ちにホストンの學會のこゝに移る。すると「僕の席に御出でなさい」と言はる。まゝに、隣りの、車まで行き靜かな席で話した。ホストン會合のプログラムの見せにくれたのは、流石に幹事だけあつて手許が明るいからだ。話の末は日本の話にまで飛んだが、夜の更けない先に別れを告げ「明朝早く、ホストンのハンチントン驛で一しよに下車しませう」と約束して別れた。

車は走つてゐる。サイラキウス驛で、約束の如く吉田源治郎君が此の列車に乗り込んでくれた。氏は京都伏見から來てオーホルン神學校に勉學してゐる青年牧師、そして天文友達。此の夏、日本出發以前に會つた以來の話をした。同君は、今夜は、自分と會ふため三十分間此の列車に乗り込んでくれたのである。歸りに御寄りなさいで「有難う」で、何かいふ小驛に、同君は下車した。……其の後、自分は寢臺に入る。

## 十二月二十七日(水)

午前六時、ホストン市中のハンチントン驛で下車、ステピンス氏と一しよに、近くのコブレイ・ホテルに行つたが、同氏は室の豫約がしてあつたが、自分は約束して置かなかつたため「満員謝絶」やむなく、まだ外のうす暗い市中を二三尋ねまばつて、遂にコブレイブラザといふ一等旅館に一室を見出した。

